

これからの高校に期待される学力

上智大学教授 奈須正裕氏 講演まとめ

【学力論の2つの系譜】

- 「内容」を基盤とした学力論…コンテンツ・ベース ⇒ 「何を知っているか」(伝統的な学力論)
- 「資質・能力」を基盤とした学力論…コンピテンシー・ベース⇒「どのように問題解決をしていくか」
知識や技能は問題解決の道具や材料として使われるべき。問題解決ができるよう、「使える知識にする」という考え方(新学習指導要領、PISA型学力)

【資質・能力(コンピテンシー)への注目】

- コンテンツ・ベース・テストの成績は将来の成功を予測しない(1970年代、マクレランドの発見)。意欲、感情の調整能力、問題解決能力、対人関係能力が人生の成功にとっては重要。
- 育成すべき資質・能力の3つの柱(知識・技能/思考力・判断力・表現力等/学びに向かう力、人間性等)
知識・技能はもちろん重要だが、それを使って思考・判断・表現し、社会・世界と関わり、よりよい人生を送る。ここまで含めて学力と捉える。
- 子どもたちの65%は、将来、今は存在していない職業に就く。47%の仕事が自動化。機械ができるものは機械に任せ、人間にこそできる教育を目指すべき。価値の判断、創造、意思決定、多様な他者との共感・協働などは人間でなければできない。AI化の進展、Society5.0は、教育の「人間化」の好機。
- 私立大学入学者の半数近くがAO・推薦入試。細かい知識は問わないが、持っている知識を組み合わせ問題解決する能力(コンピテンシー)をみている。
- ICTを文房具(わからないことがあれば、いつでも調べる道具)にする。一通りの情報を得たその先で立ち上がる問いを出発点にする授業を求めたい。
- 学びを現実の社会に存在する本物の実践に近づけると知識も本物になる。

【「網羅」から「看破」へ】

- 中教審答申では、個々の事実に関する知識は大事だが、それを学習の最終目標とするのではなく、新たに獲得した知識が、既存の知識と関連付けられ、組み合わせられ、概念になっていくことを目指している。
- 網羅する学習(Coverage Learning)
⇒個々のコンテンツをバラバラに覚えるので、その奥にある重要なものはわからない。
- 看破する学習(Uncoverage Learning)
⇒教科の本質が明示され、子どもたちも理解できる。教科の中核的概念がわかる。
多くのことを知っているという学びから、なぜそうなのかということを見通せる授業に変わっていく。新学習指導要領における「歴史総合」は、近代以降しか扱わない。歴史的知識は、過去の出来事の意味を理解し、今、世界で起きていることに対処し、予測して、どんな社会をつくるかの足場として使うべきとの考え方に基づく。知識があっても使えなければ無意味。

【探究的で教科等横断的な学び】

- 学びの状況を本物にしていくと、教科を越え、教室を出る学びに変わっていく。
- 探究的な学びにより、より深いことがわからなくなり、また深く問うことになる。それにより、深く問う力が育つ。さらに深めていくことにより、人間にとってさらに大事なことに気づくようになる。

【何を取り、何をあきらめるか?】

- 何かを取ることは何かをあきらめることでもある。新校に想定されているヒト・モノ・コトといったリソースを目標に対していかに効果的に使うか。従来行ってきたものの何かを捨てざるを得ないのではないか。従来の学校にあった当たり前を当たり前と考えない創造をしていく。
- 学校の部活動を社会教育に移管することで、佐久のまちづくりの機会や佐久の大人と子どもたちが関わる機会が増えることも考えられる。
- 学力の質の豊かさを実現するには、少なく教えて豊かに学ぶことが大切。「そんなことも知らない」けれど、本当に知らなければならぬことは何かを問い直し、子どもたちが人生をよりよく生き抜くために必要な学力を育む学校の構想を願う。